じんけんふれあいシリーズ⑤
# ともに生きる喜びを実感できる地域社会の実現

## 平成25年度人権標語優秀作品
## 見ないふり　見過ごすより　今動こう

佐藤 汐恩　さん

現在少子化がすすんでいるので、子どもの誕生は大変うれしい。双子や三つ子は、めでたさが倍になります。江戸時代も同じで、双子・三つ子の誕生をめでたいといって手当を与えた記録があります。仙台藩では1765年から、双子を生んだ母親に米五石、三つ子の場合は七石五斗与えることを決めています。三重・福岡・宮崎・鹿児島などは、男女の双子を夫婦子（ミヨウトゴ）と呼んで、家が繁栄するといって喜んでいます。しかし、多くの藩では双子、三つ子を産んだ母親を畜生腹といってのしっています。男女の双子を、前世で心中（シンジュウ）した人の生まれかわりとして忌み嫌ったところもあります。この誤った価値観のために、双子で生まれた子の片方を養子（里子）に出したりお寺に預けたりしています。

偏見のある価値観は、差別となり人々を苦しめます。部落差別も同じです。

### 1　部落差別は　偏見のある価値観で差別するようになったからうまれたのです

8月の市報で近世（江戸時代）の部落史についてふれたので、今回はそれ以前の中世（平安時代末～室町時代）の部落史についてみていこうと思います。

907年に奴婢解放令（ぬひかいほうれい）が出て、奴婢はなくなりました。しかし、中世になると人々は、「けがれ」を清める力を持った人や祭礼などで芸能をおこなった人を、差別するようになっています。このことについて、市内で使用している中学校の教科書には、次のように書かれています。

**2　社会科　中学生の歴史　帝国書院**

昔は、天変地異（てんぺんちい）・死・出血・火事・犯罪（はんざい）など、通常の状態に変化をもたらすできごとにかかわることを「けがれ」といいました。「けがれ」をおそれる観念（かんねん）は、平安時代から強まり、「けがれ」を清める力をもつ人々が必要とされてきました。しかし一方で、彼らは異質な存在として、差別を受けるようにもなりました。中でも河原者（かわらもの）とよばれた人々は、死んだ牛馬から皮をとってなめすことや、井戸掘り・庭園づくりなどを手がけていました。天下一と賞賛された善阿弥（ぜんあみ）をはじめとする、庭園づくりの名手も現れて活躍（かつやく）しましたが、彼らの仕事は社会にとって必要でありながら、特別な能力を発揮（はっき）するものとしておそれられました。

なお、「けがれ」は、近代以降に生まれた不衛生という考え方とは異なります。

### 3　人権尊重しない価値観を持ち続けては　差別はなくなりません

呪術（じゅじゅつ）を行う陰陽師（おんみょうじ）には、朝廷に仕え公家（くげ）となった権門陰陽師（けんもんおんみょうじ）と民間陰陽師がありました。民間陰陽師の中には差別された人たちもいました。同じ仕事をしているのになぜ差別されるのか？

差別は、差別をする人がつくり出したものです。差別は、ひとつの価値観で、他者を異質として排除することによって起こります。多様な人々の人権を尊重することが出来なかった人々がつくった価値観。それを今だにもち続けては、結婚差別や就職差別はなくならないと思います。

注　権門陰陽師…官位が高く権力・勢力のある陰陽師。安倍清明の子孫の土御門家など